

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第22号

目次

アルキウム ビブリオテカ
archivum と bibliotheca

— 就任の挨拶に代えて

林 信夫 2

京都大学大学文書館を見学して

加藤 諭 3

大学闘争が遺したものはピラだけ？

池田 浩士 4

日誌 6

大学文書館の動き：

『戦後学生運動関係資料』Ⅲの公開を
開始しました 7

人の動き 7

「一覧」という名の大学広報誌

坂口 貴弘 8



本部本館地下の中央食堂（1970年）



現在の中央食堂

現在、本部構内にある中央食堂は、もともと本部本館（現在の百周年時計台記念館）の地下にあった。1931（昭和6）年1月、学友会共済部による学生食堂が開店した際は、階上まで列をなす大盛況だったという。現在の場所へ移転したのは、工学部8号館が竣工した1972年。40年後の今年4月、建物の耐震工事に伴う大幅な改装を経て再オープンした。

アルキーム ビブリオテカ
archivum と bibliotheca
 — 就任の挨拶に代えて

京都大学大学文書館長 林 信夫

藤井讓治先生の定年退職に伴う館長退任の後を受けて、この4月に館長に就任いたしました。藤井先生の前任館長の佐々木丞平先生も含めて、館長を文学研究科の教授が務められることは至極当然のように思われますが、私のような法学研究科に席を置く者が就くことには違和感がある向きもあろうかと思えます。それ以上に、特に図書館機構長・附属図書館長を兼務していますので、私自身果たして職務を全うすることができるかどうか不安なままですが、行政や立法の文書をいかに整理し、保管・伝承するかは、私の専門である古代ローマ社会の法研究においてもすでに問題となっていますし、また情報公開・保管に係る諸法律はまさに法学の分野と無関係とはいえない、と牽強附会をするしかないかもしれません。

さて、一般にアーカイブというときのラテン語語源の ^{アルキーム}archivum は、ギリシア語に由来し、もともと行政司法を司る場を意味していたところから、公文書を保管する場所をも意味するようになったとされています。ラテン語ではもともと文書 tabula が置かれる場所を意味する tabularium という単語で同様のことを表現していましたが、法との関わりで見ますと、特に公文書との関係では archivum が『ローマ法大全』に登場し、規律の対象となっています。このような公文書館は皇帝の居宅やその近くにあったようですが、保管については、時代や地域によって随分と差があったようです。たとえば、紀元後5世紀の著名な法典『テオドシウス法典』編纂を例に挙げましょう。古代ローマ社会の法令は、近代国家におけるような、国家領土全域に向けて均一に妥当させる、または妥当するものであるという観念の下で公布されることはなく、その多くは具体的な問題に対して具体的に、すなわち当該問題が生じた地域や人的サークルに向けて出されるとところに特徴

があります。従って、時代とともに法令の数が膨大になっていき、その膨大さ、それゆえの複雑さへの対応策として統一法典編纂を意図したテオドシウス2世は、それ以前の皇帝たちが各地、各人向けに出した法令を5世紀前半に集めることとなります。その際、地方の文書館が中央の要請に即応できたかという点、帝国東部は可能だったようですが、西部（イタリア半島より西側）はほとんど不可能で、この結果第一次編纂委員会は失敗を余儀なくされます。その後、再度地方の総督、直接には公文書館に要請を出して収集し、やっと法典としての体裁が可能になりますが、現在伝承している当該法典の全条文をみると、明らかに東部向けに出された皇帝の法令が多いことに気づきます。ここから、文書館があったとしても、それをいかに整理、保管し、後代に伝えていくかが重要であることを教えられます。

この施設と違うものとされたのが ^{ビブリオテカ}bibliotheca です。この単語ももともとはギリシア語に由来し、キケローの『縁者・友人宛書簡集』第200番（第7巻第28章）にも現れているように、自身の仕事、趣味、研究等何らかのために書籍を保管しておく場所を指しますが、書籍それ自体、しかも大量の書籍を示す単語としても用いられます。いずれにせよ、このように大量の書籍を購入し、保管する場所を持つことができたのは、知識階層たる上流層になります。『学説彙纂』等の法典をみると書庫は財産として相続の重要な構成要素として登場するだけでなく、売買の対象としても規律されています。この点が、前述の archivum と異なるところでしょうか。

いずれにせよ、このように機能の異なる施設の管理運営に同時に携わることは困難な点に遭遇する可能性を高めると思いますが、文書館の教職員の方々の助力を得ながら職務を全うできればと考えています。

京都大学大学文書館を見学して

東北大学史料館教育研究支援者 加藤 諭

2011年4月、「公文書等の管理に関する法律」(以下公文書管理法)が施行されたことに伴い、「特定歴史公文書等」の保存公開施設として、京都大学をはじめ、筆者の所属する東北大学等、全国6大学に「国立公文書館等」に相当する施設が指定されることとなった。こうした中、幸いなことに筆者は2012年2月29日から3月1日にかけて、京都大学大学文書館において研修を受ける機会を得た。ここに京都大学大学文書館での研修報告を記したい。

京都大学大学文書館は公文書管理法以前より評価選別作業に主導性をもって取り組んできた文書館であり、実務として毎年、事務本部・各部局から非現用法人文書が一括して書庫に搬入され、排架・照合から評価選別までを一手に行ってきた。公文書管理法施行以後も、その役割を担保し業務を遂行しており、「京都大学大学文書館への法人文書等の移管等に関する要項」では、保存期間が満了した法人文書について、特定歴史公文書等の認定又は廃棄の決定を館長に専決させることができることが明文化されている。筆者が勤務する東北大学史料館では、保存期間が満了した法人文書を一括して書庫に搬入することは行っていないが、見学させていただいた京都大学大学文書館の新書庫では、非現用文書搬入用の部屋が設定され、書架ごとに整然と本部、部局ごとに分けられた上で排架されており、京都大学大学文書館の設備の充実ぶりに驚かされた。筆者も研修2日目に坂口助教の説明を受けながら評価選別作業に携わる機会を与えていただいたが、現物と目録を1点1点確認していく作業は、専門的な知識が問われる上、量的にも体力と根気のいる作業であり、評価選別の検討に関わる業務を、西山准

教授はじめ福家助教、坂口助教の三名で行っていることには二重の驚きであった。また書架の間にライトが来る照明計画、ドレン自動排水型除湿器による湿度管理、書架最下段に排架しないことによる地下部屋での湿気対策等、新書庫には様々な工夫も施されており大変参考になった。一方で、こうした移管整理公開作業は、事務方、とりわけ総務との連携が欠かせない。この点、目録と排架された非現用文書との照合率は年を追って向上しており、京都大学大学文書館の教員と事務系職員との密接な協力関係を実感させられた。

利用においては、京都大学大学文書館は閲覧・展示スペースが百周年時計台記念館内にある、という地理的利便性、キャンパス模型等展示の親しみやすさも相まって、修学旅行生の見学コースになっているなど、年間の見学者も2010年度で3万人近くに達しているということで、利用者数の多さには目を見張るものがあった。資料閲覧に際しても、所蔵資料の検索システムは階層検索も整備されており、HP上では詳細な使い方が提示されていて、検索の便が高い。一方で、所蔵資料検索システムで表示される資料データの項目は空欄の箇所も散見された。大学の法人文書は、作成部局以外の者には資料名だけでは内容が分かりにくいものも少なくない。キーワードや備考にファイルの内容に関する記載を出来るだけ盛り込むようにする、また公開とされている資料が全部公開か、一部公開かが一瞥できるようにする等、検索項目の注記を充実させることで、遠方からの利用者の便はより一層増すものと思われた。最後に、京都大学大学文書館においては年度末の繁忙な折であったにも関わらず研修を快く引き受けていただいた。ここにあらためて感謝申し上げます。

大学闘争が遺したものはビラだけ？

京都精華大学客員教授 池田 浩士

1968年4月に京都大学教養部に赴任してからその年の暮れまで、私は附属図書館と法経図書室、農学部図書室のカードを検索することに没頭した。1918年からほぼ23年までのドイツ革命期についての文献をリストアップするためだった。いまのように自分の部屋でインターネットを使って資料の所在を知るなどということは、およそ夢にも考えられなかった時代である。憑かれたようなカード検索が1968年の暮れでひとまず終わったのは、69年の年明けとともに学生たちの京大闘争が始まって、私自身の焦眉の関心がそちらの方に向いたからにほかならない。

ある日、附属図書館でメモを取りながら果てしなくカードをめくっていくうちに、「ドイツ革命関係ビラ一箱」という古色蒼然たるペン字手書きの一枚に行き当たった。まぎれもなく1918年から19年の年代が記されている。目の前が真っ白になるほどの興奮を抑えて、そのままカウンターに駆け寄り、閲覧を申し込んだ。「地下書庫」とだけあってどの棚かが書かれていないので、入庫して自分で探すわけにいかなかったからだ。その日は図書館の職員さんにもわからず、探しておくので見つかったら連絡する、ということになった。もちろん、連絡は待てど暮らせど来ない。何度か督促したが、そのたびに「まだ見つかりません」の返事で、とうとう「行方不明」ということになってしまった。そのころまだごく普通だった木のリング箱にぎっしり詰まったドイツ語のビラの謄写版インクの色や文字のかすれ具合までもが、夜毎に何度くりかえし私の夢に現われたことか。存在すれば間違いなく超一級の一次資料であり、それを活用した私の研究も今より少しはましな道をたどっていたかもしれなかった。——とはいえ、その出来事のおかげで、私は、図書館を頼りにするのは研究者として間違いである、資料

や文献は自力で自腹を切って探求するものである、という正しい認識に到達することができたから、得失は半々というべきだろう。

それにしても、革命のビラが図書館に、それも遠い異国の国立大学（収蔵当時は帝国大学）の図書館などに保存されていること自体が、はたして嘉すべきことなのだろうか。ビラとは、とりわけ現実変革のたたかひのなかで書かれ配られるビラは、受け取られ読まれるその一瞬に存在意味を賭けているものではないのか。敵意や反感をいなく受け取り手は、私自身もたとえば「君が代不起立教員は即刻クビにせよ！」などというビラを四條河原町の町角で受け取ったらそうするように、たちどころにくしゃくしゃと丸めて捨てるだろう。共感を抱く手に渡れば、手だけでなく身も心も燃え立つエネルギーとなり、ビラ自身もいわば燃え尽きてその役割を終るのである。ビラとは、読み捨てられるべき表現媒体なのだ。その一枚一枚が、それぞれの一瞬を生きて、みな別々に、孤独な死を死んでいくのである。ビラを蒐集し、保存するなどということは、ビラの本質と存在意味とに反することだ。

それなのに、全国各地の大学と一部の高校で燃え上がった新左翼・全共闘運動の一環として京大闘争が始まったとき、わたしがしたことは、かつてドイツ革命のなかでせつせとビラを拾い集めて日本に持ち帰ったか、あるいは拾い集めたビラを日本人留学生者に提供した名前も顔も知らぬ人物が半世紀前に犯した間違いの、轍を踏むことでしかなかった。腐敗墮落した象牙の塔をたたきつぶし、そこに巢食う専門バカどころかバカ専門の「学者」や「研究者」をそこからたたき出すだけの肉体力も精神力もなかった私には、読み捨てられるべきビラをひたすらファイルするという間違いくらいしか、できることはなかったの

である。一万円札の原料になるわけでもなければ貧乏風を防ぐ衣服として使えるわけでもなく、ただただ場所ふさぎと紙魚の巣としてしか役立たないビラの集積は、当然の筋道として、私が焼かれるときにもう一つ棺桶を並べてその中に詰め込み、私と一緒に燃え尽きる運命だった。それが、手渡され読まれた時点で有意義に燃え尽きることができなかったビラの、あまりにも遅い有終の美だっただろう。

そのビラが、このほど、想像もしなかった巡りあわせで、手渡され読まれた場所へ帰ることになったのである。場所は少なくとも外見上はまだ同じところにあるが、もちろん時間は戻らない。それらのビラが鉄筆とガリ版で蠟引きの原紙に書かれ、謄写版で刷られたときから——原紙に書くことをカッティング、その担当者をカッター、謄写版で刷る人間をスッターとかスット（盗っ人ではなく）とか称していた——その時点から、すでに40年以上が過ぎている。かつて追跡を断念したドイツ革命のビラが京大附属図書館で眠っていたはずの年月にも、ほとんど匹敵する時間である。ドイツ革命のビラ用の紙がどれくらい劣化していたか、あるいは新鮮さを保持していたか、私には確かめることができなかった。しかし、全共闘時代のビラの紙質は、間違いなく、劣化が進んでいる。ほとんどがB4判で、なかにはその半分のB5もあるが、A判などというものは使われなかった。習字の半紙と同じ大きさのB4の藁半紙がビラのものであったが、もっとも廉価で紙質の悪いものは「ザラばんし」、つまりザラザラした半紙とか、「ザラし」とか呼ばれ、「更半紙」とか「更紙」という字が当てられることもあった。もちろん歴然たる再生紙だったから、

いわゆる刑余者の「更生」との連想もあったのかもしれない。いずれにせよ、文書館に収蔵される現物の余命は樂觀を許さない。マイクロフィルムなり電子データなりにして保存すればよいのかといえば、それこそビラの本質の全面否定でしかないだろう。ビラに書かれている内容、いわゆる情報そのものにもまして、それがそのビラとして作成され、ビラというかたちで配布され受け取られた、ということこそが、いわばその手触りや表情こそが、ビラの生命であり、ビラの意味のすべてなのである。何らかの「データ化」はビラのその生命と存在意味を殺す。

それにつけても、明治維新前後に刊行された例えば福澤諭吉の諸著作は、私が入手したものだけから判断しても、つい数日前に、百歩譲ってもつい数年前に上梓されたと言っても通用するくらい、新鮮な紙質を保っているものが少なくない。もちろん、入念な保存に努めた旧蔵者のお陰とはいえ、当時の和紙の紙質そのものが優れているからである。書籍の形をとった資料は、別の装幀や異なる印刷技術で再刊すれば、もちろんそれは初刊時のものとは別の本であるとはいえ、また別の存在意味を持つことができるだろう。だが、ビラはそうではない。ビラは、不本意にも保存されてしまったという不幸に加えて、二度と別の形では蘇ることができないという不幸を背負わされるのだ。

だがこの不幸は、これらのビラを生んだ大学闘争が、ついに現代資本主義体制はおろか、その一端をますます露骨に担う大学をさえも解体できなかった、という不幸に比べれば、まだしも小さいのかもしれない。

編集部より

本年3月、池田浩士様（本学名誉教授）から大学文書館に1960年代末～70年代初めの京都大学における大学闘争関係資料を寄贈していただきました。主にビラからなる同資料は、『京都大学百年史』編纂の際に活用させていただいた経緯があり、この度改めて大学文書館にご寄贈いただく運びとなりました。今後、整理の上で公開していく予定です。

[日誌] (2011年10月～2012年3月)

- 2011 / 10 / 1 西山准教授、教育史学会第 55 回大会シンポジウムで「大学史研究と教育史研究 ―沿革史を手がかりに―」と題して報告（於・芝蘭会館稲盛ホール）。
- 10 / 5 テレビ朝日より、1930 年代の京大の風景に関する照会。
- 10 / 5 学外より、元教授藤代貞輔の講義題目に関する照会。
- 10 / 5 学外より、元講師山口茂一に関する照会。
- 10 / 6 西山、全国大学史資料協議会 2011 年度全国研究会に参加（於・皇學館大学）。
- 10 / 7 二谷信太郎氏より、教育学部写真寄贈。
- 10 / 11 坂口助教、学術交流協定にもとづき来学したタイ・カセサート大学学生に京都大学の歴史について講義。
- 10 / 11 防衛大学校より、所蔵資料の点数等に関する照会。
- 10 / 14 国立科学博物館に福井謙一関係資料を貸出し（「ノーベル賞 110 周年記念展」（2011 年 11 月 1 日～2012 年 1 月 22 日開催）で使用のため、～2012 年 2 月 1 日）。
- 10 / 14 和田榮一氏より、創立第 80 回記念祭運動会関係資料等寄贈。
- 10 / 20 学外より、吉田キャンパス内の志賀越道の痕跡に関する照会。
- 10 / 25 大塚雅裕氏より、合格証書寄贈。
- 10 / 28 小樽商科大学百年史編纂室より、特定歴史公文書等目録に関する照会。
- 10 / 29 京都橘大学より、大学文書館施設見学のため来館。
- 10 / 30 『京都大学大学文書館だより』第 21 号発行。
- 10 / 31 大学文書館教員会議。
- 11 / 1 日本女子大学より、大学文書館の施設・業務視察のため来館。
- 11 / 2 東京大学より、大学文書館の施設・業務視察のため来館。
- 11 / 4 法学研究科より、帝国大学時代の官印等寄贈。
- 11 / 6 西山、「女子高生・車座フォーラム 2011」で京都大学の歴史について講演（於・京都大学百周年時計台記念館）。
- 11 / 7 テーマ展「時計台の昔と今」開催（於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室、～2012 年 1 月 15 日）。
- 11 / 7 大阪大学より、大学文書館の施設・業務見学のため来館。
- 11 / 8 二谷信太郎氏より、学園歌集寄贈。
- 11 / 10 学内より、大学文書館における資料整理の方法に関する照会。
- 11 / 11 国立公文書館より、デジタルアーカイブ・システムに関する意見交換のため来館。
- 11 / 11 西川久子氏より、黄檗会関係資料寄贈。
- 11 / 12 西山、第 6 回京都大学ホームカミングデーで三高記念館準備室展示資料について解説。
- 11 / 18 東京外国語大学より、大学文書館見学のため来館。
- 11 / 24 西山、日本女子大学総合研究所公開研究会において「大学アーカイブズの役割と意義」と題して講演。
- 11 / 28 間島正史氏より、間島正美関係資料寄贈。
- 11 / 28 平田辰一郎氏より、平田穰関係資料寄贈。
- 11 / 30 学外より、第二次世界大戦中の中国からの留学生に関する照会。
- 12 / 1 西山、新採用職員研修で大学文書館の施設を案内。
- 12 / 5 大学文書館教員会議。
- 12 / 8 室賀艶子氏宅を訪問、資料搬出作業。
- 12 / 14 学外より、昭和 28 年頃の宇治分校の施設配置図に関する照会。
- 12 / 20 日本経済新聞社より、清野謙次について取材。
- 12 / 21 上田浩一氏より、屏風・芳名帳寄贈。
- 12 / 21 総務部より、廃止官印寄贈。
- 2012 / 1 / 10 立川康人氏より、『たけみ会誌』寄贈。
- 1 / 17 企画展「京大史のなかの広報」開催（～4 月 1 日、於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。
- 1 / 19 朝日新聞社より、瀧川元総長の式辞について取材。
- 1 / 20 内閣府より、大学文書館施設の現地調査のため来館。
- 1 / 20 学外より、多田道太郎に関する照会。
- 1 / 23 大学文書館教員会議。
- 1 / 25 西山、高エネルギー加速器研究機構史料委員会に出席。
- 1 / 26 日本経済新聞社より、清野謙次について取材。
- 1 / 27 松田陽一氏より、『京都大学における「学生の祭」の歴史に関する調査報告書』等寄贈。

- 2 / 1 京都新聞社より、企画展について取材。
- 2 / 6 読売ファミリーより、「回生」表記について取材。
- 2 / 7 大学文書館運営協議会。
- 2 / 7 朝日新聞社より、折田彦市について取材。
- 2 / 20 大学文書館教員会議。
- 2 / 20 九州大学大学文書館より、大学文書館の施設・業務視察のため来館。
- 2 / 24 読売テレビより、折田先生像について取材。
- 2 / 29 東北大学史料館より、研修のため来館（～3月1日）。
- 3 / 1 大学文書館リーフレットの改訂版発行。
- 3 / 1 東京藝術大学総合芸術アーカイブセンターより、大学文書館の施設見学のため来館。
- 3 / 1 南川高志氏より、藤縄謙三関係資料寄贈。

- 3 / 2 立教学院より、歴史展示室見学のため来館。
- 3 / 6 坂口、全国大学史資料協議会東日本部会研究会で「京都大学大学文書館における学内文書の移管と整理」と題して報告（於・武蔵野美術大学新宿サテライト）。
- 3 / 8 学外より、第三高等学校の校舎に関する照会。
- 3 / 8 池田浩士氏より、大学闘争関係資料寄贈。
- 3 / 12 読売テレビより、過去の卒業式に関する照会。
- 3 / 15 基礎物理学研究所における法人文書管理状況の点検。
- 3 / 21 『京都大学大学文書館研究紀要』第10号発行。
- 3 / 23 大学文書館運営協議会。
- 3 / 26 大学文書館教員会議。
- 3 / 26 『戦後学生運動関係資料』Ⅲの公開開始。

大学文書館の動き

『戦後学生運動関係資料』Ⅲの 公開を開始しました

大学文書館では、『戦後学生運動関係資料』Ⅲの公開を3月26日に開始しました。

『戦後学生運動関係資料』Ⅲは、1961年から1965年までの京都大学を中心とした学生運動に関係した資料群です。学生・職員等学内の各種団体・個人によるビラ・機関紙・各種刊行物を中心に、合計1615点を公開しました。

60年安保闘争終息後のこの時期、学生運動は分裂が深刻化し、やや低調となっていました。国立大学運営管理法案や日韓条約への反対運動、原水爆禁止運動などが争点として取り上げられていました。

大学文書館では、1950年代の資料群である『戦後学生運動関係資料』ⅠおよびⅡ、1960年代後半の資料群である『大学紛争関係資料』Ⅰ～Ⅴをすでに公開しています。今回の新資料公開によって、京大における学生運動関係資料は60年安保闘争時を除き、一つの流れとしてつながったこととなります。多くの方のご利用をお待ちしています。

人の動き（2011年10月～2012年3月）

2012年3月31日 藤井讓治文学研究科教授、大学文書館長を退任。

「一覧」という名の大学広報誌

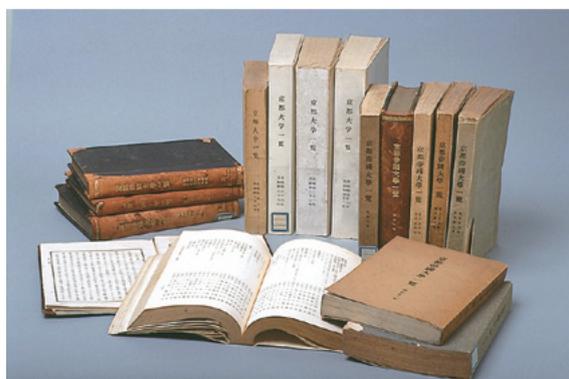
京都大学大学文書館助教 坂口 貴弘

菊池寛の小説「受難華」(1926(大正15)年)には、主人公の寿美子が『東京帝国大学一覧』という本を購入するくだりがある。“モダンガール”寿美子は、別々に知り合った二人の男性が東京帝大の同窓生ではないかと推測をめぐらせ、神田駿河台下の丸善で『一覧』を買い求め、その中の卒業生名簿を繰って二人の名を見つける。実際にも丸善はこの本を販売していたのだが、編集発行者は東京帝国大学であった。つまり大学が公式に、卒業生名簿などの個人情報に掲載した冊子を刊行していたことになる。この時期、『一覧』という名がつく冊子は、京都帝国大学その他の各帝大、また第三高等学校などの旧制高校も発行していた。『京都帝国大学一覧』には、文学部を卒業した菊池寛の名もある。

だが『一覧』は単なる卒業生名簿ではない。文字通り、大学の基本的情報を一覧できる冊子として学内外に頒布される点で、一種の広報メディアの性格も備えていた。大学創立の翌1898(明治31)年に初めて刊行された『京都帝国大学一覧』は、以後もほぼ毎年度発行され、沿革、関係法令、規則類、現職員、旧職員、在学生、卒業生、敷地図の最新データを収録した。これらの事項は、同時期に文部省が直轄学校一覧の編纂要目に指定したものと概ね一致しており、帝国大学もこれに倣っていたと考えられる(「文部省令達通牒書類」識別番号01A00329)。

『一覧』は市販されただけではない。京都帝国大学の全容を概観できる書籍として、皇室や各省大臣、大使館や他大学にも贈呈していた。あわせて学内各所にも業務利用のため配布されている。1901年以降は、英文版の『一覧』であるKyoto Imperial University Calendarも作られるようになった。

戦後教育改革の中で、『一覧』には新たな役割が付加される。1948(昭和23)年、文部省は「日本における高等教育の再編成」で、学校一覧は「どの大学が自分の志望に適して



『京都帝国大学一覧』『京都大学一覧』

いるかを知るため」の情報源であるべきと指摘し、いわば受験生向けの大学案内の機能を果たすよう求めた。その6年後、新制京都大学は『一覧』を11年ぶりに復刊し、従来の記載事項に加え、各学部等の概要を説明する欄を新設している。

1960年代末、『京大広報』が創刊され、各学部も独自の広報誌を出すなど、京大の広報活動は多角化の時代を迎える。また、業務用には規程集や職員録などが別途作られるようにもなっていた。多種の刊行物を編集する労力に比して、初代の大学広報誌ともいえるべき『一覧』は「速報性にも欠け、現実的活用には供し得ない点が多く」なったとして、1975年に廃刊が決まる(「京都大学一覧及び概覧調書」識別番号01A20974)。

近年、受験生向けや一般向けの広報活動は質量ともに多様化し、速報性に優れたホームページは時々の最新情報を随時発信している。それらに比べ『一覧』は確かに地味である。しかし京大創立以来の歴史をひもとく上で、各年度の基本データを網羅している『一覧』の史的価値は高い。現在発行される『京都大学概要』などの各種刊行物も、将来は同様の価値を帯びるだろう。明治以来の『一覧』計50冊は、大学史の基幹的資料としての新たな役割が与えられ、引き続き活用に使われている。